

# 濁流沈む校舎に無力感



鹿児島市河頭中元教頭 緒方義春さん（74）



床がめくれ上がった体育館。1993年8月、鹿児島市の河頭中学校（緒方義春さん提供）

## 「生徒に見せられぬ」惨状



机やイスが散乱する教室。1993年8月、鹿児島市の河頭中学校（緒方義春さん提供）

8.6水害30年  
あの日を語る

鹿児島市武岡5丁目の元教員緒方義春さん（74）は8月6日が訪れるたび、かつて勤務した同市の河頭中学校に足が向く。校舎を遠くから眺めると、この地が濁流にのみ込まれた無残な姿を思い出す。

1993年8月6日は教頭を務めていた河頭中で朝から勤務していた。雨が降り続き、昼過ぎには国道3号を走るバスが運休すると情報がいった。夏休みの校内では女子ソフトテニス部が渡り廊下で素振りの練習をしていた。「バスがなくなる。早く帰りなさい」。2階の職員室

から大声で部員に呼びかけた。とっさの判断だった。顧問も帰宅させ、1人学校に残った。

校舎裏の土手から滝のよう流れ流れてくる泥水。初めて見る光景に「この雨は異常だ」と身構えた。夕方雨脚が強まり、学校前を流れる甲突川が決壊。茶色い濁流が押し寄せた。

近くの高台に住民5、6人と避難した。校庭の水かさが一気に増し、学校全体が沈んでいくように見えた。何もできない悔しさで胸が締め付けられた。

濁流は周囲の民家も襲った。住民と一緒に窓をたた

き割り、逃げ遅れた母親と幼い子ども2人を救出。屋根の上に高齢の親を避難させる家族もいた。

日が暮れ、暗闇が1帯を包んだ。「ドーン」。山が崩れるような音や、校舎に漂流物がぶつかる音が響く。何が起きているのか分からず恐怖だけが募った。日付が変わる頃、近くの河頭浄水場に身を寄せた。早朝学校に向かうと、変わり果てた学びや言葉に失った。

水が引いた運動場には1層ほどの土砂が積み、がれきやドラム缶などが散乱していた。校舎は床上3層ほどまで浸水。1階の教室

### 30年前の水害体験募集

30年前の水害体験を募集します。6月末までに4000字程度にまとめてお送りください。写真などの情報もお寄せください。〒890-8603（住所不要）南日本新聞社報道部「防災取材班」、メール shakai@37news.com ファクス 099（2156）16300。

天井付近に机がぶら下がり、体育館の床は波打つようにめくれ上がった。生徒に見せられない。水害の途方もない威力を思い知った。全壊など自宅が被害を受けた生徒が多かった。親類宅から避難しようとして土砂崩れで一時生き埋めになった生徒もいた。

平成五年八月六日（金）、鹿児島県内の各地域は豪雨災害に見舞われた。今から三十年前、本校も甚大な被害を受けている。当時勤務された先生方や在籍していた生徒たちの記録が『浸水した河頭中と私の体験』と題した冊子にまとめられている。当時の状況を記録した写真や生徒たちの手記等から学校の様子や生徒の心情がよく伝わってくる。被害を目の当たりにした方々にとっては、今でも忘れることのできない日となった。あれから三十年、すべてが復旧し、私たちは何事もなかったように日常を送っているが、復興に向けて途方もなく尽力いただいた郷土の方々のことを忘れてはならない。この三十年前の豪雨災害を教訓に、風水害等に対しては迅速に危険を予測し、回避できるようにしていきたい。

（学校長）